

九州歯科大学第74回卒業式及び第144回大学院学位記授与式

式辞

歯学科74期、口腔保健学科13期ならびに大学院修了生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

そして保護者ならびにご家族の皆様、本学に入学以来、成長を見守ってこられた皆様方のお歡びはひとかたならぬものと拝察しております。教職員一同、心よりお慶び申し上げます。

また本日、ここに、服部誠太郎福岡県知事をはじめ、多くの来賓の方のご臨席を賜りましたことに対し厚く御礼を申し上げます。

3月に入り、本格的な春の訪れを感じる季節となりました。そのような中、第74回卒業式と第144回大学院学位授与式を無事挙げることは、大変喜ばしい限りでございます。

一方、今年卒業される歯学科6年次生の皆さんの多くが、本学に入学された6年前の2020年は、ちょうど新型コロナウイルス感染症が蔓延し始めた最初の年で、入学式ができませんでした。世界中の人々にとって未曾有の経験であるパンデミックの渦中において、当たり前なのが当

たり前にできなくなり、社会的に様々な制限を受けている中で、新入生として大きな不安を抱えながらのスタートとなってしまいました。

口腔保健学科13期及び大学院修了生の皆さんも、高校時代、大学生時代に同じように、コロナ禍の不自由な生活を経験しております。このように困難な時代を共に過ごし、弛まぬ努力で今日のよき日を迎えた皆さんが、学位記を手にされる姿は、私たち教職員にとっても、また皆さんを支えてくれた保護者様をはじめ関係者の皆様にとっても感慨もひとしおではないでしょうか。

本学は全国の29校ある歯学部、歯科大学の中で唯一の公立大学で、「口腔医学の総合大学」として、我が国の歯学教育及び歯科医療の発展に貢献して参りました。歯学科は創立110年余となり、一方、口腔保健学科は前身の附属歯科衛生学院の歴史を踏まえますと、歯科衛生士育成の歴史は80年近くにも及び、本学の卒業生は全国各地の地域医療の現場を始め、国内外の様々な分野において活躍をしております。

現在、歯科医療を取り巻く環境が大きく変わろうとしている中で、高等教育には「何を教えたか」から「何を学び、身に付けることができたか」への転換が求められております。本学では他大学に先駆けて、アウトカム基

盤型教育の導入や診療参加型臨床実習の促進などの様々な教育改革を行なってきました。

歯学教育に限らず、様々な分野で重視されている Think globally, Act locally(地球規模で考え、足元から行動せよ)という考え方を、本学では国際教育交流プログラムや地域歯科保健活動などの様々な教育活動を通して、最終的に歯科医学および医療界において地域の現場だけでなく、世界レベルで活躍できる歯科医療人の育成を目指しております。

口腔健康は、全身健康や人としての生活の質、すなわち QOL を維持していく上で大変重要であり、今後、超高齢社会を迎えていく我が国の医療・福祉の現場では、ますます歯科医療のニーズが増していくことは確実です。歯科医療の現場では、歯科衛生士不足は常態化していますが、ここ数年、歯科医師数も減少傾向にあり、地域偏在の問題が生じてきております。したがって地域医療を支え、社会貢献できる歯科医療人の育成を行なっていくことは本学に課せられた極めて重要な使命であると考えています。

皆さんが踏み出そうとしている現代社会は、まさに「正解のない時代」

です。少子高齢社会といった社会構造の変化、AI 技術の爆発的な進化、地球規模の環境変化、そして価値観の多様化など、数年前の常識が、明日には旧聞に属するような、予測困難で急激な変化の渦中に私たちはいます。

歯科医療の世界も例外ではありません。デジタル技術の導入や再生医療の進展により、治療の在り方は劇的に変わりつつあります。

このような先行き不透明な時代において、私たちはどう生きていくべきなのでしょう。

第一に、生涯学習、またはシームレスな学びという言葉がありますが、生涯を通して主体的に学び続けなければなりません。

大学で得た知識は、長い歯科医療人生における「基盤」に過ぎません。技術の進歩が加速する現代では、学びを止めた瞬間から、職業医療人としての時計は止まってしまいます。しかし、これは単に新しい技術を追うことだけを指すではありません。

「なぜだろう？」という知的な好奇心を持ち続け、変化を恐れずに自らをアップデートし続ける姿勢こそが、不透明な時代を生き抜く最大の武器となります。

第二に、デジタル時代だからこそ「対話」を大切にしなければなりません。

技術が高度化し、効率が優先される社会になればなるほど、人間にしかできない「共感」の価値が高まります。歯科医療人としての仕事は、単に治療することではありません。痛みや不安を抱えた患者さんに対して、「一人の人間」として向き合い、その人を支えることです。患者さんの声なき声に耳を傾け、心を通わせる。この「アナログな対話」こそが、どんなに時代が変わっても揺るがない、医療の本質です。

そして第三に、「良識ある市民」として広い視野を持たなければなりません。

皆さんは歯科医療人である前に、この混迷する社会の一員です。専門領域に閉じこもるのではなく、社会で何が起きているのか、人々に何が求められているのかを広い視野で捉えてください。激動の時代において、進むべき道に迷ったときは、常に「これは社会のため、地域住民のため、患者さんのためになるか」という倫理観を羅針盤にしてください。その誠実な歩みが、結果としてあなた自身のキャリアを確かなものにするはずで

す。私たちは歯科医療人として社会全体の公衆衛生を担う役割だけではなく、一社会人として、社会全体を達観して、必要に応じて問題解決に関わっていくことが求められています。

松尾芭蕉が『奥の細道』の旅を通じて体得した俳諧の精神である『不易流行』という言葉がありますが、いつまでも変化しない本質を忘れない『不易』と、新しい変化を取り入れる『流行』。この両立こそが肝要です。歯科医療の技術や社会制度は、今後も驚くべき速さで変化していくでしょう。皆さんはその変化を恐れず、柔軟にしなやかに受け入れてください。しかし、その根底にある『病める人を救う』という医療者としての倫理、誠実さという不易の部分である本質だけは、決して見失ってはなりません。変えるべきものを見極め、変えてはならないものを守り抜く。そのバランスの中にこそ、真のプロフェッショナルとしての道があります。

本日、博士号あるいは修士号を授与された修了生の皆さん、誠におめでとうございます。皆さんが今日この日を迎えるまでには、学部教育とは比較にならないほどの、孤独で粘り強い探求の日々があったはずです。研究が思うように進まない焦燥感、先行研究の厚い壁、そして自らの仮

説が根底から覆されるような試練。それらを一つひとつ乗り越え、未知の事象に光を当てて一つの論文として結実させた皆さんの知的な誠実さと情熱に対し、心からの敬意を表します。

先述した通り、今、私たちの社会は、かつてないスピードで構造が変化しています。今ある「正解」が即座に古びていく不透明な時代において、大学院で培った「自ら問いを立て、客観的なエビデンスを積み上げ、論理的に結論を導き出す」というプロセスそのものが、皆さんの揺るぎない背骨となります。断片的な情報が溢れる現代だからこそ、深く、多角的に物事を洞察できる皆さんのような高度専門職業人の存在が、社会から切実に求められているのです。

皆さんが手にした学位は、単なる個人の達成の証ではありません。それは「知の公共性」に寄与し、人類の健康と福祉に貢献するという、重い社会的責任を伴うものです。専門領域を深める一方で、常に社会の動向に目を開き、自身の研究や技術が「人間にとって真に幸福をもたらすものか」を問い続ける。この柔軟な視座と、揺るぎない倫理観こそが、リーダーとしての資質に他なりません。

大学院における研究活動は、研究者としての序章でしかありません。歯学分野を含めた医療分野の進歩には、専門的医療、研究活動による知見の集積は必須のもので、大学院修了生の皆さんには是非、大学院での経験を通して修得された専門家として、また研究者としての能力を、社会に活かして行ってほしいと願っております。

また願わくは、我々と一緒に、アカデミアの一員として、歯学教育、研究、専門臨床の発展に貢献してくれる者が、一人でも多くいることを期待しております。

最後になりますが、かつてのアフリカの地で生涯を医療に捧げたアルベルト・シュバイツァー博士の言葉を贈ります。

シュバイツァー博士は「自分のためにだけ生きる幸せは長続きせず、他者に奉仕することの中にこそ、揺るぎない自己の充足がある」と説きました。すなわち「自身の幸福を願うなら、他人の幸せのために尽くさない。それこそが、人間としての最も価値のある生き方である。」ということです。これはプロフェッショナリズムの利他主義の考え方にも通じますが、『他人の幸福のために尽くすこと』、これこそが医療人の原点であり、人生の充足感の源泉です。患者様の笑顔を自らの喜びとし、社会のために

尽くす道を選んでください。その歩みの中に、皆さん自身の豊かな人生が必ず待っています。

皆さんは本日、学舎を巣立つことができ、改めて歯科医療人として社会で生きていくことの意義をそれぞれ考えて、真の幸せをそれぞれが手にすることを強く願っております。

皆さんの前途が、希望と幸福に満ちたものであることを心より祈念し、私の式辞といたします。

本日は、おめでとうございます。

令和8年3月10日

九州歯科大学

学長 栗野 秀慈